

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	大虹（小詩會詠草）：和歌：文苑
Author(s)	星陵；芒村；夕闇；鳳章；白月；蓮北；花柴；錦浦；紫郎
Citation	龍南會雜誌， 1 1 5： 7 4 - 7 8
Issue date	1906-03-08
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5925
Right	

霞のとばりかいやれば

灯こもし 赤き夜の町

被衣かいきすがたのらうたけし

大路小路も影更けて

花の吹雪のましるきに

細身朱鞘の落し指し

内ぞゆかしき笠の内

橋慶辨も興あれや

和

歌

大

虹

小 詩 會 詠 草

星 陵

柳わけし小傘のうちの夢悲し治兵工もいはず小春もなかぬ
水をかへて酒となさんの力なき君道説くな春は短し

春の灯こもしの金屏に

靡りの色も花の宴

舞の袂のあや錦

夢さめやらぬ若人が

歩みものうき足ざりに

聲は長閑けき戀語り

柳くゞりて歸りては

月に更け行く春の夜の町。

夕月に香ほのめく梅小路文莚もてこし女の童かな、
 ほのぼのと温泉いづゆの煙雲となる谷間に寒く紅梅の咲く
 金殿の清香すずか熏するそよ風にはほるむらしき紅梅の花
 忍びやかにひきし細戸のすきもれし灯影のまに梨淡く咲く
 水彩やとさし緑の色さむし晝紅梅に雨細うなる
 盛り短し何愚かしき物狂ひ椿赤きに春を古へ

○ 世 村

和讀誦して西にゆく子の笈ひの上に花散りかゝる荒川づゝみ
 青柳にけふる春雨たともなく利根の河邊はたそがれにけり
 散る花に聲なきうらみ鐘の音は消れてしまにかへるゆふぐれ
 樂堂をめぐりて春の花白くあした静かに雨ふり灑ぐ
 あげばりに夕日しばくかぎりひて管絃の船に花ふゞきする
 美しき夢よりさめて朧夜の花にむつる蝶の姿や
 山ひとつこゆれば春の水長く梅咲く村の風あたゝかき
 白梅のかをりよくもる月影よかくて我世の春美しき

○ 夕 關

わさなる胸にうつせば天地はちいささまゝに春宮殿

天をとぶ歌の童女といたましき姿してねむ春ゆく宵は
 春はわぬ雲の姿は大聖の生れたる曉の様してうきぬ
 春はよし霞によりし草によし花にあけては酔ふによるしも
 観音の御堂つくと木匠は白杉わりてこの春をへぬ
 龍宮のさんごの花よ天堂のみ星の花よ春はげによき
 君がひく絃をもぬけて春の氣は一つ一つに花となりぬる
 春園の妃となりて若草の野の大虹をわたらん君か

○ 風 章

みやしろに清水流れて花咲きて奈良は太古の春とし生れぬ
 人の世は淋しのぞみの失せたらば山まろけれど水ながけれど
 美はしの夢はあしたの花にさめてたさな心地の春あたゝかき
 興なきに秀才一夜を花に泣く春とはいへど現世なれば
 平和の春をし梅の精と生れしをるや君に歌まるらする
 夕映をしばしの榮ねと嘆きつゝも高きを仰ぐ詩人の春

○ 白 月

眞帆片帆沖の島山薄れゆきて海原十里夕がすみする
 落花のせて何地ゆくらむ春の水野はたそがれの霞はてなき

涅槃會の、鐘うちしめり古寺のふる雪白く櫻ちるなり
 天の園もれしかをりのゆらぎかな桃に櫻にふく春の風
 繪馬堂に今か夕日はかぎろひて花見る人の皆美しき
 朝あけを花の香ゆらぐ野に立ちてそらろわき出る清きたもひで

蓮

北

美はしきとこよの宮に船出せし海士なつかしき薄月夜かな
 天地はかくてやなりし雲浮び新汐ぞすむ春の曙
 森かげや春の御靈のふところに夢安らげき小羊のむれ
 大海も高なりそめん大空も緒琴しらべん樂の響よ
 明日もまた世にうかる身を鶯の春の讚歌ほめうたなごよはしむる

花

柴

筏なげし少女の笑み淋し春の小川の水ゆるうして
 聲ほそく讀經もれくる山寺の夕日斜めに白梅かをる

錦

浦

現かも夢かもしらに戀ゆくとまきくに得たへぬ春の風哉
 しづれては白梅かふる振袖をかまげてすぎぬ春雨の傘
 殘雲や霞にうかぶ日向路の山皆高き春の風哉

春風や日傘の中の緋鹿の子の人美しき玉嚙峨の水
白梅や童舞すぎての御宴朗詠洩るよ夕がすみ哉

紫

耶

たれ込めて人ねたましの春三月寂しとのみに琴を抱きぬ
春に仰ぐ虹のまぼろし口にして常世の春を酔ひまごろみぬ
人の世の戀とないひそ花に係る若きふたりが春夢見姿
春風にとばかりゆれて笹舟の白き花藻にそとよりそひぬ
戀知らぬ天の小蝶のざれ言に春をすねたる連翹の花
鶯と唯かりそめに御名よびて君に戀せし春の我が罪

紫 溟 吟 社

朝貢の舟の白帆や春の海 矢川
蒼海に遺珠を採るや春の人 弋牙
春の海辨天鳥に小舟哉 李王
水明り道の暗きに蛙なく 敗齋
雑魚すくふさでに飛び込む蛙 紫子
哉蛙なくや田向の家の小窓の灯 瓢郎

青柳や長廊見わた太鼓橋 弋牙
青柳の波止場に積荷揚荷哉 李王
紙をすく六田の里の柳哉 蓮北
明六つとふれし繪踏の太鼓哉 瓢郎
村一の馬鹿も繪踏に召されけり 同
吾足の瘤止しき繪踏かな 敗齋
鉄漿はげし隣女や春寒き 李王